

主催 邦楽連合会

社団法人 義太夫協会

中央区銀座六の十八の二
新橋演舞場別館
電話 (五四一) 五四七二番

清元協会

港区南青山二の十七の十三の二〇二
電話 (四〇二) 〇二四〇番

財団法人 古曲会

中央区銀座八の六の三新橋会館
電話 (五七一) 〇二一六番

常磐津協会

港区南麻布五の三の四十六
電話 (四四四) 三〇二〇番

長唄協会

中央区銀座八の十一の九
電話 (五七二) 四九四五番

社団法人 日本三曲協会

港区赤坂二の十五の十一の四〇三
電話 (五八五) 九九一六番

(五十音順)

後援 東京都

昭和五十二年二月十三日(日)

第一生命ホール

第一部 十二時半開演 四時終演
第二部 四時半開演 八時終演

'77 都民芸術フェスティバル

第七回

邦楽演奏会

— 邦楽名曲選 —

「邦楽演奏会」によせて

東京都知事 美濃部 亮 吉



芸術とは社会のゆとりの象徴であり、その精神の高さの表現であると思います。すぐれた芸術との出会いが、私たちの日常生活にどれほどのやすらぎと勇気を与えることか、はかり知ることができません。

都民のみなさんにすっかりおなじみとなりました都民芸術フェスティバルも、いまや新たな段階に入ったということができると

思います。

第九回目を迎えた今年、参加作品の芸術性はいよいよ厚みと深みを増し、一段と充実した高度なものへと、たしかな歩みを示しております。かねてから最高の芸術を都民の身近かにおきたいと念願してきた私にとっても、文字通りこの願いが真実となり、この上ない喜びを感じております。

この芸術フェスティバルが生み出すゆたかな芸術から、日々都会の狂おしい喧噪にあけくれている都民のみなさんが、深いこいと励ましを受けとってくれることを願っています。また、今回公演の一つであるこの「邦楽演奏会」が、そのための大きな一役を演ずることを期待しております。

第一部番組（十二時半開演）

一、三曲明治松竹梅

箏低音

米川文子
藤代文津奈
田中文華奈
長谷川文千佐
山元文志生
五月女文勝於
五月女文勝弘
藤井治童
鈴木勝童
大川豊童
柴田童
高橋柯童

箏高音

米川文勝之
米川文志津
大貫文加津
竹下文登志
野間文綺志
関文晴
早藤文貞以
齐藤文香代
妹尾文千香
白鳥文千恵
小川文多緒
永山文佐恵
齐藤文志己

尺八

二、萩江八島

唄
萩江みさを
萩江ちか
同江いと

三味線

萩江さわ
萩江とさき

三、義太夫寺子屋の段

菅原伝授手習鑑

松王丸竹重之助
千代竹越道
戸浪竹本駒龍
源蔵竹本素八

三味線 鶴澤三生

四、清元梅柳中宵月（十六夜）

浄瑠璃 清元 登志寿太夫 三味線 清元 梅吉
同 清元 政崇太夫 同 清元 松之助
同 清元 成美太夫 上調子 清元 吉三郎

五、常磐津 恩愛 贖 関守（宗清）

浄瑠璃 常磐津 文字太夫 三味線 常磐津 菊寿郎
同 常磐津 須磨太夫 同 常磐津 東蔵
同 常磐津 和佐太夫 上調子 常磐津 文奈
同 常磐津 一三太夫

六、長唄 八重霞 賤機帯（賤機帯）

唄 杵屋 長光 六 三味線 岡安南甫
同 杵屋 長光 同 岡安喜三
同 杵屋 六勢弥 同 岡安茂登
同 杵屋 六善若 上調子 稀音家 六三和

囃子

笛 福原百之助
小鼓 望月左之助
同 望月太健志
大鼓 梅屋右近
太鼓 望月太喜雄

七、三曲都の春

箏 吾孫子松鳳
三絃 吾孫子静子
尺八 大村力童

箏 井口秀鳳

井口秀鳳 山田鳳泉 山本千鳳 大谷栄鳳 渡辺富鳳 藍沢充鳳 関林鳳 小橋本琴鳳

第二部番組（四時半開演）

一、三曲三谷管垣

八寸管

納富壽童 山下慶童 鈴木光童 沼尻芦童 荒屋夢童 杉山駿童 横田竹童 新井柴童 安納都童 大神徐童

岡田雨童 鈴木木童 嶋永童 福山珠童 森永童 市川鹿童 小白喬童 小浜雅童 藤井恕童 宮沢悟童

二尺管

吉沢甫童 栗原虎童 小野玉童 原田穂童 三浦佳童 山崎直童 飯塚芳童 小津登童 奥野津童 小田尻童 中村恵童 飯田谿童 進藤篁童

二、義太夫 堀川猿廻しの段

近頃河原の達引

与次郎竹本 土佐廣 俊竹本 綾之助 お俊竹本 朝重 伝兵衛竹本 光末 母竹本

三味線 豊澤 仙廣 津賀昇 鶴澤

三、一中節 熊野

浄瑠璃 宇治文彩 三味線 宇治文喜 同 宇治文好 同 宇治文紫香 同 宇治文美子

四、清元六歌仙容彩(喜撰)

同	同	同	同	淨瑠璃
清元	清元	清元	清元	清元
志寿雄太夫	志寿子太夫	志寿荣太夫	小志寿太夫	志寿太夫
				三味線
	上調子	同	同	清元
	清元	清元	清元	清元
	志寿朗	志多郎	国次郎	一寿郎

五、三曲根岸の四季

同	高橋	高橋	高橋	高橋
菊地	横堀	坂本	高橋	高橋
清辰和	清雪	和惠	正子	荣清
				箏
	三絃			福智
	坂川	田中	原島	和田
	荣扇	玉清	荣秀	荣志

六、常磐津戾橋

同	同	同	淨瑠璃
常磐津	常磐津	常磐津	常磐津
初勢太夫	勢寿太夫	宮尾太夫	千東勢太夫
			三味線
	上調子	同	同
	常磐津	常磐津	常磐津
	子之助	文字	文字
		之助	兵衛

七、長唄綱館

同	同	同	唄
東音	東音	東音	和歌山
藤倉	福田	宮田	富士郎
脩一	克也	常男	
			三味線
	同	同	同
	杵屋	杵屋	杵屋
	勝雄	三十朗	和四蔵

籬子
笛
小鼓
望月太喜右衛門
同
大鞆
望梅屋右近
太鼓
望月太喜雄

歌詞と解説 (演奏順)

第一部

三曲 明治松竹梅

いわゆる明治新曲の代表曲の一つです。箏の高音と低音の二重奏による純箏曲で、三絃の手はありません。松竹梅にちなんだ七首の和歌を歌詞としています。いずれも時の皇室の御歌です。

作曲者は大阪の菊塚検校で、明治三十五、六年ごろの作です。構成は、前唄(四首)―手事―後唄(三首)の手事物形式で、聞かせどころは、手事では最後の後散らしの部分、唄では後唄のかかりの「大君の千代田の宮の梅の花」のところでしょう。歌詞にふさわしくみやびやかで、明るくて大らかなびききをもった曲です。演奏技法の上では、三重押し(極めて強い押し手)がたびたび出ることが難手法とされています。

明治天皇御製 三十三年勅題 「松上の鶴」
風の音は静まりはて、千代呼ばふ

田鶴ヶね高し峯の松原
昭憲皇太后御歌 同 右
栄えゆく御園の松にひな鶴の
千代のはじめの声を聞かばや

明治天皇御製 三十四年勅題 「雪中の竹」
この上にいく重降り添ふ雪ならむ
篋たかくなりまさりつゝ

明治天皇御製 三十五年勅題 「新年の梅」
たちかへる年の朝日に梅の花
香り初めたりゆき間ながらに

昭憲皇太后御歌 同 右
大君の千代田の宮のうめの花
笑みほころびぬ年の始めに
皇太子(のちの大正天皇)御歌 同 右
新玉のとしのはじめの梅の花
見る我さへにほゝあまれつゝ

皇太子妃(のちの貞明皇后)御歌 同 右
新らしき年の祝ぎこと言ひ交す
袖にもかをる梅の初はな

二、 萩江節 八島

萩江節は、明和(一七六四―七二)のころ、初代の萩江露友が長唄からわかれて、独特の細やかな唄い方をはじめたのを祖としている。その後幕末になって、三代目の清元齋兵衛がこれに力を入れ、新作を作ると同時に、唄い方にも工夫を加えて、今日のような萩江節を完成させた。
今日演奏されるこの「八島」は、地唄にあった曲をとり入れたもので、やはり幕末のころ、四代目露友の時代に作られた。
内容は、謡曲の「八島」の後半を名古屋の藤尾勾当が地唄

に作曲していたもので、西国行脚の僧が八島の浦で義経の亡霊に逢い、八島合戦のありさまをきくという場面。
萩江節としては数少ない修羅物だが、繊細な節で亡霊の語り口をちゅうわすという、むつかしい曲となっている。

三下りへ釣りのいとまも波の上、霞渡りて沖行くや、海士の小舟のほのぼのと、見えてぞ残る夕暮や。へ浦風までものどかなる、しかも今宵は照りもせず、曇りもはてぬ春の夜の、朧月夜にしくものぞなき。へ西行法師は喚けとて、月やは物を思わす、闇は忍ぶにようか、浦風出たぞ来そ来そくも。また修羅道の関の声、矢叫びの音震動せり。今日の修羅の敵は誰ぞ。なに能登守教経とや。あら物々しや、手並は知りぬ。思いぞ出ずる檀の浦の、へその船いくさ今ははや、闇浮にかえる生死の、海山一度に震動して、船よりは関の声、へ陸には波の桶、へ月に白むは、へ剣の光。へ潮に映るは、へ兜の星の影。へ水や空、空行くもまた雲の波の、打ち合い刺し違うる、船いくさのかけひき、浮き沈むとせしほどに、春の夜の浪より明けて、敵と見えしは群れいる鴨、関の声ときこえしは、浦風なりけり高松の、浦風なりけり高松の、朝嵐とぞなりにける。

菅原伝授手習鑑

三、 義太夫寺子屋の段

「菅原伝授手習鑑」は延享三年(一七四六)八月、大阪竹本座初演。竹田出雲、並木千柳、三好松洛、竹田小出雲の合作。菅原道真の配流から北野天満宮の縁起を大筋とし、それに武部源蔵夫婦の苦心、梅王、松王、桜丸の三つ子の兄弟の話などを配した作品で、「義経千本桜」「仮名手本忠臣蔵」とともに、浄瑠璃の三大傑作といわれる。
この曲には、三つの親子の別れが書かれているが、この

「寺子屋」の段は、松王とその子小太郎の別れを中心にしたもので、作者は並木千柳。
松王の妻千代が小太郎を連れてきて、源蔵の妻戸浪との間にやりとりがあり(寺入り)、源蔵が承相の子菅秀才の首をとるように命じられて思案しながら帰る(源蔵戻り)、ついで松王が来て、にせ首実しわが子の首をみる(首実験)、以上の前半の伏線(今日は省略)があつてから、この場面になる。
時間の都合で一部を割愛したが、松王のモドリ(本心をうちあける場面)から、最後の有名な「いろは送り」でわが子の死骸を送るまで、この「寺小屋」は、「菅原伝授手習鑑」の代名詞にも用いられるほど、もつとも多く上演される。親子、夫婦の情愛の深さをこれほど見事に表現した作品は、他にないといつていいほどである。

へゆられてたち帰る。へ夫婦は門の戸びつしやりしめ、ものをも得いわず青息吐息、五色の息を一時にほつと、吹き出すばかりなり。胸などおろし源蔵は、天を拝し地を拝し、へハアありがたやかたじけなや、凡人ならぬわが君の御聖徳があらわれて、松王めが眼がかすみ、若君と見定めて帰つたは、天成不思議のなすところ、御寿命は万々年、よろこべ女房。へイヤもうたいの事じゃござんせぬ。あの松王めが目の玉へ、菅承相がはいってござつたか、ただし首が黄金仏でなかつたか、似たというても瓦と黄金、宝の華の御運開きと、あんまり嬉しゅうて涙がこぼれる、ハアありがたや尊や。へと、よろこびいさむ折からに、小太郎が母いきせきと、迎いと見えて門の戸叩き、へ寺入りの子の母でござんすいままよう帰りました。へという声きくよりまたびつくり、へ一つのがれてまた一つ、こりやまあなんとどうしよう。へと、妻が騒げど夫は胸すえ、へこりや、最前いうたはこのこと、若君にはかえられぬ、狼狽者め。へと、戸浪をひきのけ、門の戸ぐわらりと引き開ければ、女は会釈し、へこれはまあ、御師匠様でござりまするか、悪さをお頼み申します、どこにいやるぞ、お邪魔であるに。へと、いうを幸い、へイヤ、奥に子供と遊んでいます。連れ立って帰られよ。へと、真顔でいえば、へとお、そんなら連れて帰りましたよ。へと、ずっと通るを後より、ただ一討と切り付くる。女もしれもの、引っぱらず逃げても逃がさぬ源蔵が、

刃するに切り付くを、わが子の文庫ではつしと受けとめ、これ待った、待たせ、こりやどうじゃ。へと、刃ぬる刃も用捨なく、また切り付くる文庫は二つ、中よりばらりと経帷子、南無阿弥陀仏の六字の幡あられ出でしは、こはいかに、へと、不思議の思いに剣もなまり、進みかねてぞ見えにける。小太郎が母、涙ながら、若君菅秀才のお身代り、お役に立てて下さったか、まだか様子が聞きたい。へと、うにびつくり、へして、それは得心か。へさあ得心なりやこそこの経帷子、六字の幡。へうむ、してそこもとは何人の御内証。へと、尋ぬるうちに門口より、梅は飛び、桜は枯るる世の中に、何とて松のつれなかるらん、女房よるこべ、伴はお役に立ったぞ。へと聞くよりわつとせき上げて、前後不覚にとり乱す。へやあ、未練者め。へと叱りつけ、ずっと通るは松王丸、見るに夫婦は二度びつくり、夢か現か夫婦かと、あきれて言葉もなかりしが、武部源藏威儀を正し、へ一礼はまず後のこと、これまで敵と思ひし松王、打って交った所存はいかに、いぶかしさよ。へと尋ぬれば、へお御不審もつとも、存知の通りわれ、兄弟三人は、めいめいに別れて奉公、情なやこの松王は、時平公に従ひ、親兄弟とも肉縁切り、御恩を受けたる丞相様へ敵対、主命とはいひながら、皆これの身の因果、なにとぞ主従の縁切らんと、作病かまへ暇の願ひ、菅秀才の首見たらば暇やらんと今日の縁目、よもや貴殿が討ちはせまい、なれども身代りに立つべき一子なくばいかせん。こぞ恩を報ずる時と、女房千代といひ合せ、二人が仲の伴をば先へ廻してこの身代り、机の数を改めし、わが子は来たかとのめど。菅丞相にはわが性根を見込み給ひ、何とて松のつれなかるぞとの御歌を、松はつれなかりつれないと、世上の口にかかるとやしき、推量あれ源藏殿、伴がななくばいつまでも、人でなしといわれんに、持つべきものは子なるぞや。へと、いうに女房はなおせき上げ、へ草葉のかけで小太郎がきて、嬉しゅう思ひましよう。持つべきものは子なるとは、あの子がために手向け、思はずは前別れたとき、いつにない後追うたを、叱った時の悲しさ、冥途の旅へ寺入りと、はや虫が知らせたか、隣村へ行くというて、道までいんで見たれども、子を殺さしおこしておいて、どうまあうちへいなるものぞいな、死に顔なりともいま一度見たさに未練と笑うて下さんすな、包みし祝儀はあの子が香典、四十七日の蒸物まで持つて寺入りさすという、悲しいことがこの世にあるうか、育ちも生れも賤しくば殺す心もあ

なお、このあとでは、十六夜は川下で白蓮に命を助けられたその妾となり、清心も泳ぎができるところからこれも死にきれず、悪心をおこして、やがて鬼薊の清吉となり、悪事を働くようになる。

へ臘夜に、星の影さえ二つ三つ、四つか五つか鐘の音も、もしやわが身の追手かと、胸に時うつ思ひにて、廓を脱けし十六夜が、へ落ちて行方も白魚の、船のかがりに網よりも、人目いとうて後先に、心置く籍川端を、風に追われて来りける。へ嬉しや今の人声は、追手ではなかつたそうな、廓をぬけてようくと、こまで来たことは来たれども、行先知れぬ夜の道、どこをあてどに行こうぞいの、へしばしたたずむ上手より、梅見帰りの船の唄、へ忍ぶならしのぶなら、闇の夜はおかしやんせ、月に雲のさわりなく、辛気待つ宵十六夜の、うちの首尾はエエよとのよいとの、へきく辻占にいそくと、雲脚早き雨空も、思いがけなく吹き晴れて、見交す月の顔と顔。へや、十六夜ではないか。へ清心様か、逢いたかつたわいなあ。へすがる袂もほころびて、色香こぼるる梅の花、さすがこなたも憎からで、へ見ればそなたはただ一人、廓をぬけてどこへ行くのじゃ。へどこに行くとは胸窓な、今日御追放ときいたゆえ、ひよつとこれぎり逢われまいかと、思えば人のいうことも、心にかかる辻占に、人目を忍んで来た私、いずれへなりともどもに、連れて退いて下さんせ。へその志はかたじけないが、ふとした心の迷いより、御恩を受けし師の坊の、お名を汚せしもつたいなさ。へただ何事もこれまででは、夢と思ひて清心は、今本心にたちかえり、へ京へ上つて修行なし、出家得脱する心、そなたは廓へたちかえり、よい客あらば身をまかせ、親へ孝行尽しやいのう。へそりや情ない清心さま。へ今さらうも愚痴ながら、悟る御身に迷ひしは、蓮の浮気やちよつと惚れ、浮いた心じゃござんせぬ、へ弥陀を誓ひにあの世まで、かけて嬉しき袈裟衣、結びし緑の珠数の緒を、へたまくと逢うに切れよとは、仏姿にありながら、へお前は鬼か清心様、きこえぬわいのととりすがり、恨みなげくぞまことなる。へそりややるのは嬉しいが、見るかげもない所化あがり、わしに心中立てずとも、思いきるのそなたのため。へそんならどうでも私をば、連れてのいては下さんせぬか。へサア悪いことはいわぬほどに、早う廓へ帰りたいの。へその言葉が冥土のみやげ、へ岸より覗く青柳の、枝も

るまいに、死ぬる子は媚よし美しゅう生れたが、可愛やその身の不仕合せ、なんの因果に痘瘡までしまったことじゃ。へと、せきあげて、かっぱと伏して泣きければ、(中略)へこりや、女房、小太郎が死骸あの乗物へ移し入れ、野辺の送り菅まん。へあいと返事のそのうちに、戸浪が心得抱いてくる、死骸を網代の乗物へ、乗せて夫婦が上着をとれば、哀れやうちより覚悟の用意、下に白垢麻痺、心を察して源藏夫婦、へ野辺の送りに親の身で子を送る法はなし、われ、夫婦が代わらん、へと立ち寄れば、松王丸、へいや、これは我が子にあらざ、菅秀才の亡骸を御供申す、いずれもは門火門火。へと、門火を頼み頼まるる。へ御台若君もろとも、しやくり上げたる御涙、冥途の旅へ寺入りの、師匠は弥陀仏釈迦牟尼仏、六道能化の弟子になり、賽の河原で砂手本、いろは書く子をあえなくも、散りぬる命是非もなや、あすの夜たれか添乳せん、らむ愛い目見る親心、剣と死出のやまけ越え、浅き夢見し心地して、あとは門火に酔いもせず、京は故郷と立ち別れ、鳥辺野さして連れ帰る。

四、清元梅柳中宵月(十六夜)

安政六年(一八五六)二月江戸市村座で初演された。河竹黙阿弥四十四歳の時の作品で、十六夜清心を主題とした「小袖曾我薊色縫」の四立目、十六夜清心出逢いの場に使われた浄瑠璃。配役は岩井桑三郎のちの半四郎(十六夜)、市川小団次(清心)で、清元は延寿太夫、家内太夫、美佐太夫、徳兵衛、梅次郎らであった。

鎌倉極楽寺の所化清心は、大磯の遊女十六夜のもとへ通い、女犯の罪を犯した科により追放の身となる。それと知った十六夜は廓を抜け出して来て清心に逢い、どうにもならなくなつた二人は、ともに心中しようとする場面。

「臘夜に憎きものは男女の影法師」という角書にあるように、幕末の江戸の類廃気分をうつつし出した歌詞と曲節は、情愛と色気がこぼれんばかりの名作として、よく演奏される。

しだれて川の面、水に入りなん風情なり。へ南無阿弥陀仏。へすでにこうよと見えければ、清心あわて抱きとめ、へあこれ待った、早まるな。へイエイエはなして殺して下さんせ、しよせん長らえられぬわけゆえ、へナニ、長らえていらぬとは、へ勤めする身に恥かしい、私やお前の、へエエそんならもしや愚僧が胤を、へアイナア、へムウ、このまま別れて行くときは、腹の子までも聞かから聞、とあつて一緒にともなわば、へ逢廓をぬけしそなたゆえ、捕えられなばかどわかし、へふたたび親目に逢わんより、いつその場でともどもに、へそんなら死んで下さんすか。へほかに思案はないわいの。へほんに思えば十六夜は、名よりも年は三つまし、ちよと十九の厄年に、へわが身も同じ二十五の、この暁が別れとは、花を見捨てて帰る雁、へそれは常世の北の国、これは浄土の西の国、頼むは弥陀の御誓ひ、へなんまいだ、へなんまいだ、へこれがこの世の別れかと、互いに抱き月影も、またもや曇る雨もよい、へこの世で添われぬ二人が悪縁、へ死のうと覚悟極めし上は、へ少しも早う。へ南無阿弥陀仏、へ西へ向かつて合す手も、凍る夜寒の川淀へ、ざんぶと入るや水鳥の、浮名をあとに残しける。

五、常盤津 恩 愛 贖 関 守 (宗清)

文政十一年(一八二八)十一月江戸市村座初演の「貫之雪源氏嵐眞」の二立目に初演された。配役は宗清(坂東三津五郎)、常盤御前(岩井桑三郎)、奈河本助作詞、三代目常盤津小文字太夫、五代目岸沢式佐ほかの出演であった。

源義朝の没後、その愛人常盤御前が、今若、乙若、牛若の三人の子をつれて諸々をさまよい歩くうち、山城の園木幡の関に來かかる。折からの雪の中、関守の宗清にみとがめられ、子供を助けるために操を破り、清盛にしたがうことになるという、雪中問答の場面。

宗清が主人公で、ちよと「勧進帳」の富樫のような心持と、常盤御前に対する同情心とほのかな色気が必要とされ、難曲とされている。

なお、この場面が少し陰気だといので、舞踊会などではこのあと「鞍馬山」をつけ、牛若丸の見た夢の場面にするこ
とが多い。

「君命を受けて宗清は、身をかたいとの夜の闇、守れば敵も夜嵐も、矢
猛心の矢屏風に、隔てきびしき板雨。へ降つたる雪かな、野も山も皆白
妙と、いつか頭に積る雪、寒さに負けぬ宗清が、六波羅よりの上意受け、
左馬頭が枝葉の子供、見つけ次第に首打と、清盛公のきびしき掟、そ
の制札に、松を手折つて松を助くと、内府重盛殿の詞を賜うは、何さま
心あり気な御説、とにもかくにも関守は、話相手のないで退屈、睡魔
をさけるこの兵書、治世に乱の忘れぬため、かの孫康が雪あかり、どり
や友人を聞いて見ようか。へ故郷を出でしにまさる涙かな、夢に別る
枕とは、げに定家が詠み歌も、へ身に呉竹の伏見なる、雪の剣に裳さえ、
紅さそう照り草の、今ははかなき常盤の前、痛わしや今若と、乙若君を
両袖に、包めどあまる憂き事の、世を牛若は懐に、凍る乳房を抱き寝の、
へ顔を見るさえいとどなお、歩み疲れておわしける。へ母様危のうござ
ります。必ず怪我して下さるなや。へオオ今若よういうたもった。紫
竹の里を出でしより、頼りに思うはそなたばかり、思えば昨日は昔にて、
鏡が石に影頼み、三人の子供は儲けても、御運つたなき源のこの行末、
必ず平家の武士に、見咎められぬようにしてたもや。へいどう乙若頭是な
見へも間もない。二人とも辛抱して歩いてたもや。へいどう乙若頭是な
く、へもう歩くのはいやじゃ。へアアこれはまたどうしたも、今
にねんねをさすほどに、ききわけて歩くものじゃ。それ見や、向うが雪
あかりで、鳥羽の細手や木幡の里、へやがて木幡の山越えて、馬はあれ
どもかちはだし、君を思えば行くぞとよ。歩くものには花紅葉、花の手
車手を引いて、へ歩みかかれれば雪風に、笠をとられて突く杖の、雪に涙
も玉鉢の、その道もせを行き悩む。へアア夜中といひ、怪しい女、幼な
子を多勢連れ、この関を越す気であるうが、ここは木幡の関、へ義朝が
残党詮議のため、宗清殿のきびしい固め、サアありように名乗って通れ
へサア妾はもと都の市人、伏見のあたりへしるべあつて、尋ぬるうちに
この大雪、二人の子供に道はか行かす、思わすも目を暮らしたり、どう
ぞ情にこの関を、へアアそう吐かすほどなお怪しい。さあ女めと立ち上

幼な子の、その源は谷の音、峰のこだまとおとずれて、南柯の夢と覚め
にける。

六、長唄 八重霞 賤機帯(賤機帯)

文政十一年(一八二八)六月、山王日枝神社の祭礼のとき、
その踊り地として作られた。四代目杵屋三郎助(十代目六左
衛門)の作曲で、前弾と置唄は、その後で作られた。なお劇
場の舞台にかけられたのは、明治二十五年七月の鳥越座が最
初である。

能の「隅田川」に「桜川」を加えたような筋だが、直接に
は一中節の「尾上の雲霞機帯」をもとにしており、ところど
ころにその味を残しているのも特色の一つにあげられる。

花盛りの隅田川の渡し場に、都からわが子の行方をたずね
て、狂女が通りかかる。その子は人さらいにさらわれて、行
方不明になったので、母親は子供恋しさの一念で狂乱状態に
ある。それを見た渡し守は、からかうのによい相手と、面白
半分に、その持っている掬い網で、散り浮く花をすくい集め
たら、その子の行方を教えてやろうという。

狂女はそれをまにうけて、一生懸命に花をすくうので、渡
し守は気の毒になり、本当に慰めてやろうとするが、狂女は
羯鼓の踊りを踊りながら狂って行くという筋。

花やかな隅田川に、狂女と船頭のやりとりという単純な場
面だが、全体に華やかさと明るさがあり、そしてその中に狂
女の哀愁の気分をうまく表現しなければならぬ曲。よく流
行している。

へ名にし吾妻の角田川、その武蔵野と下総の、眺め隔てぬ春の色、桜
に浮かぶ富士の雪、柳に沈む筑波山、紫匂う八重霞、錦をここに都鳥、

れば、へヤレ待て兩人、きけば子供を連れた女とな。源氏の余類に似合
いの註文、身がじきじきに糺してくりよう。へ何が思案の宗清が、氷る
足駄に善悪の、邪正の道を踏み分けて、関の扉の庭伝い、へ賤しからざ
る上臈の、供をも連れずただ一人、見れば幼ない子供を連れ、はてあで
やかな。へきつと眺めていたりしが、へこりや女よきけよ、今四
海ようやく穏やかなるも、先だつて亡びたる、左馬頭義朝、大勢の子供
あつて、所々方々に漂泊なし、ことに五条の雑仕常盤が腹には三人の男
子ある由。生け置いては後日のため、見つけ次第に首打と、新たに建
てしこの関所、この宗清が眼力に、一目見たれば逃れはない。常盤なり
と白状いたせ。へ様子問われてふさがる胸。へそんなら三人の子供があ
る故に、さあその疑いも子供ゆえ、子のある女はいずれにも。へああ
われなそのいいわけ、子供供の事はさておいて、いわずと知れた芙蓉のま
なざし、国色のきこえある常盤御前、外にあらうはずがない、身が引つ
たてて福原殿へ。へすりや妾をどうあつても。ほんに思えばこの身の濡
れ衣、是非もなき世の有様じゃなあ。へこりや者共、大事の落人関所の
庭へ。へさあ女め、立とう。へ是非なくなくもあらしに、引立てられ
て常盤御前、へ隙間もあらば遠近の、たつきも知らぬ関の庭、巢を離れ
たるうぐいすの、へ吹雪に迷う風情なり。へもこうなつては籠中の鳥、
逃ぐるると逃しはせぬ。しかし一人ならず三四人、思えばふびんな事
もあり、お幸い、へうしろに立ちし高札の、雪打ち払い文字のあ
や。へコレこれを見よ、この高札に松を手折つて松を助く、へ操にかけ
し詞づめ、返事を松の高札に、手折るともまた助くとも、へこの宗清
へ仰せなれど、へ生けてはおけぬ落人の、へ素性を明かして助かるか、
イヤサもし常盤なら手にかける、また松ならば助けるとも、思案きわめ
て返答いたせ。へサアそれは。へさあサア。へなるほど妾こそその
常盤、とても叶わぬこの身の行末、さあいさぎよう手にかけて、へお
よい覚悟、観念なせ。へ抜き放したる氷の刃、峯の吹雪に照りさそう、
光は夜半の月代と、見紛ううちにこはいかに、刃物はそれて谷影の、岩
の間に雪散つたり。へアアそりやみずからを助けんとして、へ松を助くる
制札の、掬きびしき清盛殿、松の操を破れという、謎がとければその松
の、雪もとけよと君の敵命。へすりやその松に松の操を。へ色かえぬ松
色かえる松、へして三人の子供は、へ小枝もともに、へ雪を払うて
へすぐさまこれより、ささ参ろう。へいざ御供と宗清に、助けられたる

古跡の渡りなるらん。へ春も来る、空も霞の滝の糸、乱れて名を流す
らん。へ笹の小笹の風といひ、花と愛でたるうない子が、人商人にさそ
われて、行方いずくと白木綿の、神に祈りの道たずね、浮きてただよう
岸根の舟の、こがれこがれていざ言問わん、我が思い子の、ありやなし
やと狂乱の、正体なきこそあやなけれ。へ船人これを見るよりも、好い
なぐさみと戯れの、気がいよ、気がいよと、手を打たたき囁すに
ぞ、へ狂女はきいて振り返り、ああ気がいと曲もなや、物に狂うは
我ばかりかは、鐘に桜の物狂い、嵐に波の物狂い、菜種に蝶の物狂い、
三つの模様を縫いにして、いとし我が子に着せばやな、子を綾瀬川名に
も似ず、心関屋の里はなれ、縁の橋場の土手伝い、行きつ戻りつここか
しこ、尋ぬる我が子はいずくぞや、教えてたべと夕汐に、へ船長なおも
拍子にかかり、へそれその持ったるすくい網に、面白う花をすくいなば、
恋しと思ふその人の、ありかを教え参らせん。へなに、面白う花をすく
えとか、いでく花をすくわん。へあら心なの川風やな、人の思いも白
浪に、散り浮く花をすくい集めん、心して吹け川風、沖のかもめの、ち
りやちりちり、むらむらばつと、ぱつと乱るる黒髪も、取りあげて結う
人もなし。へ船長今は気の毒さ、何がなしおにと立ちあがり、二上りへそ
もさても和御寮は、誰人の子なれば、何程の子なれば、尋ねさまようそ
の姿、見る目も愛しと諫むれば、へ音頭おんどと戯れの、鼓の調べ引き
しめて、羯鼓を打って見しようよ。へ面白の春の景色や、筆にもいかに
尽くさん、霞の間には榊桜、雲と見えしは三吉野の、吉野の川の滝津瀬
や、へ風に乱るる糸桜、いとし可愛の児桜、したひ重ねし八重桜、一重
桜の花の宴、いとしらし。へ千里も薫る梅若や、へ恵みを仰ぐ神風は、
今日ぞ日吉の祭御神楽、君が代を、久しかれとぞ祝う氏人。

三世山勢 松韻 作曲
吾孫子 松鳳 編曲

七、三曲都（きこ）の春（はる）

山田流は江戸時代に歌を主とした箏曲として発達した流儀で、今日でも歌曲本位ですが、この「都の春」は、歌曲でも手事風に近いものとしてできた曲です。三世山勢松韻が、東京音楽学校（現芸大）教授時代（明治二十三年）に作った曲で、音楽学校奏楽堂の開場式にこの新作を発表、演奏したものです。

都といつても東京ではなく、京阪の春をたたえた歌で、作歌は先代の鍋島家の姫君。曲の構成は、初めに長い前奏があり、独吟から前唄、そこに手事があり、本調子そのものが二上りで納まるという華やかな曲で、三味線に台広駒を使っている点も、山田流としては変わったところですが。本日の演奏では、吾孫子松鳳編曲の合の手があります。

へ残るくまなくさわりなく、光りかがやく朝日かけ、加茂の川風のどかなる、都の春になりぬれば、野山の草木おしなへて、合、花咲きにけり、白妙の富士の高嶺もみちのくの積りし雪の名残りなる、合、とけて流るる川水も、行末広き浪花渦、波路のどけき四方の海、寄せくる船のうち集い、合、めぐみも深き大君の、豊かなる世にたちかへり、萬代歌ふ声ぞ絶えせぬ、よろずよ歌ふ声ぞ絶えせぬ。

第二部

一、三曲三谷（さん）菅（すが）垣（がき）

琴古手帖によると、肥前国長崎正寿軒にて一計子より黒沢琴古が伝えられたと記されています。

古伝三曲のような經典曲と異なり、外典曲として一般に吹かれており、本曲のなかでは一般になじみ易い曲です。

三谷と名のつく曲は、本曲中にいくつかありますが、琴古流本曲であるこの三谷菅垣がもっともよく知られております。三谷というのは、文字通りに三つの谷と解釈する考え方で（古米霊鳥とされている鶴は、巢をいとなむ際に、水源が三つある場所、つまり三谷をえらぶとされている）、三谷は三味の意で、心を定め安定した状態に入るといふ禅思想から発したとする考え方があります。

また、菅垣というのは、箏の手法の「スガガキ」から由来するといわれています。つまり歌なしで演奏する弦楽器の曲という意味ですが、これがいつ、どのようにして尺八本曲の名称になったのかは明らかではありません。別に、神前で奏する和琴の弾き方だともいわれております。

演奏は一尺八寸の本手と二尺の替手で演奏する事が多いのですが、まれには一尺三寸の曙調子を加える事もあります。

近頃河原達引

二、義太夫 堀川猿廻しの段

為川宗輔、筒井半二、奈河七五三助の合作で、天明二年（一七八二）正月、江戸外記座で初演された。（異説も多くある）はじめから、この「堀川の段」が有名で、また、とくにすぐれている。

井筒屋伝兵衛はお俊と相思相愛の仲であるが、横濱官左衛門がお俊に横恋慕して、さまざまな妨害をする。伝兵衛は横濱を切り、暫間の久八がその罪をひきうけてくれたが、困つてしまう。一方、お俊は堀川の貧しい生家に預けられており、兄の猿廻し与次郎と盲目の母は、訪れた伝兵衛とお俊を逢わせまいとする。ここから今日のこの場面になる。

そして、伝兵衛に対してお俊の心を知って二人を心中に出してやり、猿を廻して門出を祝うという場面。なお、二人は聖護院の森で心中しようとするが、横濱の悪事があらわれ、めでたく結ばれるという筋になっている。

天明（一七八一―一七八）時代の義太夫節の特長を十分に發揮した作品で、華美な表現と技巧で難曲の一つに数えられている。とくにこの「堀川の段」はすぐれており、口語の写実的表現、せりふのいいまわしなど、四人の登場人物のおりなす情愛は変化に富んでいる。

曲中、「へそりゃきこえませぬ伝兵衛様……」はあまりにも有名で、身こそ遊女なれども、一生を託した愛人のため、一緒に死のうという美しい心がこの一言に尽されている。

へ頃しも師走十五夜の、月は浮ゆれど胸の闇、過ぎし別れのいい交、死なば一緒と伝兵衛が、忍ぶ姿のしよんぼりと、たたずむ軒は見覚えの、たしかにここと門の戸へ、さわる合図の咳ばらい、聞くにおしゅんは飛び立つ思い、上ぐる枕もうちはずす、与次郎はそばに高いひき、心も共に行灯の、灯火吹き消し差し足に、心せくほど明けかぬる、戸口のかき

がね表にも、へおしゅんじやないか。へ伝兵衛様よう逢いに来て下さんだ。と、いう声寝耳に与次郎がびつくり、起きると明ける門の口、妹が姿もくらまされ、捉える袖の振合せ、おしゅんじやない心で伝兵衛を、無理に引き込む取り違え、戸口を内からびつかりと引ききたて、へそりやこそ突きに来おったぞ、おしゅんじやない外へ出まいぞや、戸口におれが押さえている、門にいるは伝兵衛じや、おれを入れてよいものか。と、いうもがたがた胸ふるい。へこれなあ兄様、わしや表にいるわいな。へ何じや表にいるわいな、やあその声おいてくれ、そんなこと食うおれじやないわい、母者人へ、伝兵衛がおしゅんじやないを殺した故、今表へたて出した、おれ一人では手が廻らぬ、こなたも加勢して下され、加勢加勢。と、うろ／＼うろ／＼うろたえ騒ぎ、母親も、へ何じや伝兵衛の加勢、む、また外に同類でもあるのか。と、探り寄つたる伝兵衛がそばへこれ／＼与次郎、こりやどうやら娘ではないような、やあ、闇がり紛れに材木が紛りやせぬか、こなたつかまえて下されや。と、探る手先に火打箱、がち／＼ふるう附木の光。へこりや妹じやない伝兵衛じやへお袋、兄御、ええ面目もないこの姿。と、なおも小隅にかがみいる。へこりややい、そのようにしお／＼して見せて、おいらをだまして、おしゅんじやないを突こうとするのか、その手はくわぬ。と、懐より一通取り出し、こわ／＼ながらそばにより、へこりや伝兵衛、おしゅんじやないとわいと手が切れぬと、科人のわれじやよって、妹まで難儀する、それでさつきに、妹に得心さして、退き状が書かしてある、これこれを見い、これじやよって、もうもう／＼、おしゅんじやないが方に残心気は離れてあるわい。へむむ、すりやおしゅんじやないの退状を。へこりや退状じや／＼。へええその心とは知らず、いい交した詞を誠と思つて、迷つて来たが無念なわい、口惜しい。と齒をくいしばる男泣き、恨みをきくも隔てたる戸口、心はそうじやないじやくり、へおおさぞ腹が立と道理じや／＼、まあとつくりと氣をしめて退状を見て下さんせ。へおおそれでよい、長う物いやんな、肩が出るぞ、伝兵衛、おれが読んできかしくとも、皆目おれは祐筆じや、さあ／＼読んだ／＼。へこれまでの御養育、海山にもたとえ難き親の御恩、ことさら不自由なる御身の上、何とぞ首尾よう勤めをのがれ、世を楽に過こさせまし候わば、せめて少し御恩報じ、孝行の片端にもなり候わんと、そのみ朝夕祈りまいらせ候所、二世までといひ交しまいらせ候伝兵衛様、思わずこの度の御身の難も皆われ故に候え、今さら見捨て候ては女の道立ち申さず候、不孝とは思ひながら、ともに

までもわからぬ道理じや、が、これ二人ながら母者人の今の言葉、御合点がまいりましたか、ええこりや、汝も得心してくれたか、合点がいたか、ささ合点したらば、どうぞこの場を立ち退く分別、しかしその形では人目に立つ、京の町を離れるまで、この編笠に顔隠し、幸いの猿廻し、まめで二人が末長う、めでとう女夫になりとける、門出の祝いにこの与次郎が、お初徳兵衛が祝言の寿、こなたも別れの盃、いや／＼祝言の盃と、祝い唄うも声低に、へお猿はめでたやな、婿入姿も、のつしりと、これ、さりととは／＼のうあるうかいな、さんなまたあるうかいな、お初徳兵衛様ござんせ、あまりこなたさんが来ようが遅いによつて、お初様が顔まつかにして腹立てていやすわいのう、これお初様、婿様が盃をしいたいといのう、機嫌直して盃をいただかんせ、これ／＼これ、いただくなら盃を、さんなまたあるうかいな、ややこれ婿様、足で盃をさすあまりつれない、それでは嫁御がいただかんせぬわいのう、ひぞらずとほんまに差してやらんせ、そうじやそうじや、そこでお初がいただいたものじや、これ、いただくこの盃を、さんなまたあるうかいな、これ嫁御の盃寝もこりやとせい／＼、な、これ、え、あるうかいな、さんなまたあるうかいな、これ婿様あまりつれのうさんすによつて、おしゅん嫁御様が起きさんせぬわいのう、そこらでちよつと起したり、／＼、え、こりや／＼やい、こりや、さりととは／＼のうあるうかいな、さんなまたあるうかいな、起きたら互いに抱きつきやれ、おおそれで機嫌が直つたぞ、ええあるうかいな、さんなまたあるうかいな、くるりと返つて立つたりな、立つてくれ、これ／＼立たしやませ、ついでに日和を見てたもれ、よい女房じやに／＼のうあるうかいな、さんなまたあるうかいな、日和見たらば落ちてたも、落ちてたも、これそうじやこれそうじや、お猿はめでたやめでたやな。へさあ／＼きり／＼この家を、猿廻し、まさるめでとういつまでも、命まっとうしてたも、日には見えねども見送る母、言葉もこの世ででき納め、心の中の暇乞い、明日の噂となりふりも、やつす姿の女夫連れ、名を絵草紙に聖護院、森をあてどにたどり行く。

覚悟をきわめまいらせ候。へさてはそうした心かと、おどろく伝兵衛、親子はうろ／＼。へええ氣遣いな、これ兄や、妹を内へ、早う／＼。と母があせれば与次郎も、戸口を明くれば走り行く、妹を無理に四人が顔見合したためいきつき、涙にさらに別れなく、なんと言葉も伝兵衛が、泣く目を拭い、へたんいいい交した言葉をたて、共に死とうと覚悟して、義理をたてぬくそなたの貞節、忘れはせぬ、嬉しいぞや、思い廻せばまわすほど、われこそ死なで叶わぬ身、そなたは科もない身の上、共に死んではお二人の嘆き、命ながらえ亡き跡の、といひ頼むを頼むぞと、言葉にわつと泣き出し、へそりやきこえませぬ伝兵衛様、お言葉無理とは思わねど、そも逢いかかる初めより、末の末までいい交し、互いに胸を明かし合ひ、何の遠慮も内証の、世話しられても恩にきぬ、ほんの女夫と思ふもの、大事の大事の夫の難儀、命の際にふり捨てて、女の道が立つものか、不孝とも悪人とも、思いあきらめこれ申し、一緒に死なして下さんせと、隠せし剃刀取り直す。へままたあ待て、待ちおれやい、これで死ぬると命がないぞよ、こりや何の事じや、とんとわからぬようになつてきたわい、殺しにきたと思つた伝兵衛殿より、今では汝が手強うなつたぞよ、こりやまあどうしたらよからうぞと、いふもおろ／＼母親も、へおおそうじや、我が子が可愛い可愛いと、子ゆえの闇にわきひら見ず、これまでおしゅんじやないがお世話になつた恩も義理もわきませず、一途に仲を引き分けうと思つた母は義理知らず、賤しい勤めする身でも、女の道を立て通す、娘の手前目ない、そなたの心に恥入つて、何事もいいませぬ、伝兵衛と一緒に、これ、死出の道連れしやいのう、したがこれ申し伝兵衛様、さだめて親御様たちもござりましようが、親の心というものは、人間はおろかたとい鳥類畜類でも、子の可愛さには変りはないもの、おしゅんじやない伝兵衛といわす気か、もしやお前が死なしたつた、親御たちが聞かしたつたら、悲しゅうて悲しゅうて、この世に残つてゐる氣はあるまい、いづくいかなる国果て、山の奥にも身を忍び、どうぞ逃れて下さりませ、娘が心に恥入つて、天にも地にもかけがえない、可愛い我が子を心中に合点してやる親心、ここの道理をききわけて、これ拝みます頼みます。と手を合したる母親の、子ゆえに迷う闇の闇、二人はなんと言葉さえ、涙に涙結ばるる、血筋の別れ与次郎も、涙の雨の古布子、袖くいしばりしやくり泣き。へああ伝兵衛様の歎かしやるも道理じや、またおしゅんじやない泣きやるも道理じや、母者人の泣かしやるのも道理じや、道理じや道理じや、道理／＼というては、根っから葉から、いつ

三、一 中 熊 野

一中節は元禄（一六八八—一七〇三）のころ京都で初代都一中が語り出した浄瑠璃で、その後江戸に移され、現在は、都、菅野、宇治の三派がある。

初代一中の弟子に宮古路豊後掾がいて、このまた弟子に初代の常磐津文字太夫、富本豊前掾などがあり、富本から清元が生まれ、また宮園や新内も豊後掾の門下から出たので、一中節は近世邦楽の源流といえる位置にある。

さて、箏曲山田流の祖山田検校は、山田流の基礎を作る際に、「熊野」の曲だけは特別で、一中節の方で山田流の曲をとり入れたもの。

平宗盛の愛妾熊野が、宗盛と同車して清水へ花見に行く。と、池田の宿に住む熊野の母が病気で、一目逢いたいという手紙がくる。やがて花見の宴となり、宗盛の前で舞を舞うこととなり、熊野が母の病のことを歌に託して述べると、宗盛はあわれに思い、暇を給わるといふ筋。

へさて内大臣宗盛公、洛外の花見給わんと、熊野御前を同車にて、へ隨身舎人美をつくり、先追う声もはなやかに、東山々きらする、車宿り馬とどめ、露分け衣重折りて、徒ち路をこに清水や、大悲閣にぞ着き給う。へ前駆の武士声高く、へヤア能野御前に御目通りとは緩急至極、今日宗盛公御同車にて、この清水の桜狩、御遊のさまだけ控えよと、制せられて手をつかえ、へ私事は遠江の国、池田の長が召使ひ、朝顔と申す者、（中略）なにとぞこのことお取り次ぎ、御披露願ひ上げますと、へい声はるかにもれ聞き給ひ、へ熊野に由縁の者とあれば、はやはやこれへの詞の下、へ朝顔うれしくいざり寄り、おそる恐る文取り出し、熊野が前にさしおきて、へかねてもし召さるべし、母刀自君の御いたつき、御大事にましますば、なにとぞ御許しうけさせられ、ひとまずお下りあれかしとの御ことづて、なおくわしは御文にと、（中略）

へ熊野は胸ますとどろきて、とる手おそしと母の文、読むに涙の先立ちて、へかすむ目もとも紅の、薄花桜朝露に、濡れて色添う風情なり。(中略)へ苦しからずはその文を、読みきかせよわれもまた、もののおわれは知るものと、へ仰せに否むことばなく、ふたたび文をとりあげて、二上りへ甘泉殿の春の夜の夢、心を砕くはしとなり、驪山宮の秋の夜の月、へ終りなきにしもあらず、末世一代教主の如来も、生死の捷をば逃れ給わず、すぎにし如月の頃申しし如く、この春は年ふりまさる朽木桜、今年ばかりの花をだに、待ちもやせじと心弱き、老の驚逢う事も、涙にむせぶばかりなり。(中略)へただ、かえすがえすも命のうちに今一度見参らせたくこそ候えとよ、老ぬれば、さらぬ別れのありといえは、いよいよみまき欲しき君かなと、古事までも思ひ出の、涙ながら書きとむと、へ読みもあえぬに伏し沈み、声もえ絶えぬ忍び泣き、よその見る目もいかならん。へ折しも哀れ告げ渡る、清水寺の鐘の聲、諸行無常のことわりに、今日も花とや散りぬらん。へ席改めて一献と、宗盛樹下に座し給えは、へ涙かくして熊野御前、妾お酌に参り候べし。へいかに熊野、ひとさし舞い候え。へ深き情を人を知る、のうくくわかに村雨のして、花を散らし候はいかに、へげに、只今の村雨に花の散り候よ。(中略)へ春雨の、降るは涙か桜花、へ散るを惜しまぬ人もある。へ由ありげなる言葉の種、とりあげ見れば、へいかにせん、都の春も惜しけれど、なれし東の花や散るらん。へげに道理なり哀れなり、はやく暇とらすぞ。へなにお暇と候や。へなかなかの事、とくく東に下り候え。へあらありがたや嬉しやな、これ観音の御利生なり、かくて都にお供せば、またもや御意の変るべき、ただこのままにお暇と、へはや夕告げの鳥が鳴く、へ東路さして急ぎつつ、都をあとに行く雁の、へそれは越路、へわれはまた、へ東に帰る名残かな。

四、清元六歌仙容彩(喜撰)

天保二年(一八三二)三月江戸中村座初演。作詞は松本幸二、清元は二代目延寿太夫、齋兵衛らであった。

う、朝日のお山に、誰でも彼でも、二世の契りは平等院とや、さりとはこれはうるさいこんだに、へ婦命頂礼どら如来、(中略)へここに極まる楽しさよ。へ難波江の、片葉の芦の結ばれかかり、へヨイヤサ、へコレワイナ、へ解けてほぐれて逢うことも、待つに甲斐ある、夏の雨、へヤアトコセ、へヨイヤサ、へアリアヤ、へコレワイナ、へこのなんでもせえ、(中略)へ姉さんおんじよかえ、島田金谷は川の間、はたごはいつもお定まり、へお泊りならば泊らんせ、お風呂もどんどんわいている、障子もこの頃張り替えて、畳もこの頃かえてある、お寝間のお伽もまげにして、へ草鞋の紐に仇どけの、結んだ縁の一夜妻、へあんまり憎うもあるまいか、へテモそうだろくそうである、住吉様の岸の姫松めでたきよ、へ来世は生を黒牡丹、己が庵へ帰り行く、わが里さして急ぎ行く。

五、三曲根岸の四季

この曲は山長谷検校が幕末の頃に作ったものと推定されています。山長谷検校についてはあまりよくわかっていませんが、河東節、一中節にも通じていて、そうした浄瑠璃的な特色をよく表わした山田流の新作を作り、とくに根岸に居を構えていたので、附近の情趣を素材としてこの曲を作詞作曲したものと伝えられています。

構成は、前弾からへ上野なる根岸の里のにはじまり、そのあと春夏秋冬の四季の風物を唄い、四季に応じて調絃を変え、また、各季の切れ目ごとに合の手を入れるなどして、気分を変えています。秋から冬にかけての合の手は、箏と三絃との手事的な技巧を十分に発揮させ、虫の声など聞かせ、そのあとやや短かい冬の部分から終曲になります。歌のふし以外にもいろいろと凝ったところの多い曲で、分類の上では奥歌曲となっています。

中村芝翫(四代目歌右衛門)が岩井兼三郎(六代目半四郎)の小野小町を相手に六歌仙五段返しの所作事であったが、このうち文屋と喜撰が清元、なかでもこの喜撰は清元と長唄のかけ合いで、今は別々にやるが、清元の方がよく演奏される。内容は、百人一首の歌で有名な喜撰法師が、ぐつとくだけて江戸の長屋住まい。吉原のことや当時流行のチョコクレ、ヤアトコセなどで踊るといふ不思議なものだが、この曲ではそうした節や理屈は別にして、幕末の江戸の洒落た気分、清元のイキな気分、作曲のよさなどを味わうのが主である。踊りでも素の演奏でも喜ばれ、よく演じられる。名曲である。

へわが庵は、芝居の辰巳常磐町、しかも浮世を離れ里、へ世辞で丸めて浮気でこねて、小町様の詠めにあかぬ、きやつにうっかり眉毛をよませ、へ法師々々はきつづきの、素見ぞめきで帰らりよか、わしは瓢箪浮く身じゃけれど、へ主は鯨のとどろころ、ぬらりくらりと今日もまた、浮かれうかれて来りける。へもしやと鎌をよそながら、喜撰の花香茶の給任、へ波立つ胸を押しなで、しまりなれと鉢巻も、いくたび締め水刷棒、へ濡れてみたさと手をとって、小野の夕立緑の時雨、へ化粧の窓に手を組んで、どう見直して胸ぶるい、へ今日の御見の初昔、悪性ときいてこの胸が、臘の月や松の影。へわたしやお前の政所、いつか果報も一森と、ほめられたさの身の願ひ、へ惚れすぎるほど愚痴な気に、へ心の底の知れかねて、へじれたいでは、へないかないな。へなぜ惚れさせたコレ姉え、へうぬぼれすぎた悪酒落な、へ賤が伏屋に系取るよりも、主の心がそれく、取りにくい、ええさりととは、機嫌きづまもふだんから、酔うたお客の扱いは、見なれきなれ寝顔でさると、粋を通したその後は、コレひざり言。(中略)へ粋といわれて浮いた同士、へヤレ色の世界に出家をとげる、ヤレくヤレこまかにちよぼくれ、へ愚僧が住家は、京の辰巳の、世を宇治山とや人はいうなり、へちやちやくちやえんの叫ぶ濃い茶の、緑の橋姫、へ夕べの口舌の袖の移り香、花橋の小島が崎より一散走りに走って戻れば、へ内の唄が格気の角文字、牛もよだれを、へ流るる川瀬の、へ内へ戻ってわれから集がる、螢を集めて手管の学問、へ唐もやまとも、里の恋路か、山吹流しの水に照り添

へ上野なる、根岸の里の楽しさは、へ春は鶯梅桜、つつじ山吹咲きつれて、花に心のひまぞなき、またある時は思うどち、すみれ咲く野にうちむれて、酒汲み交し遊びつつ、つくしたんぼやいろく、その手ずさみにすがの音の、長き春日をあかずして、詠めくらすおもしろき。合へ夏は卯の花たちばなの、香る野端を行きかえり、山ほととぎすおとづれて、青葉を誘う夕風の、涼しきままにうち出でて、沢辺をゆけばここかしこ、もゆる螢は須磨の浦に、あまのなはたくもしを火の、影かとのみぞ思わゆる、合へ秋はことさら百草の、花のひもとくその中に、わきてなまめく女郎花、誰を招くか花すすき、思い乱れて咲く萩の、花の錦の床の上、さし入る月のくまなきに、訪い来人もあれかしと、嵯峨野あたりを思い出で、しばし慰さむつま琴の、調べにつれて鳴き交す、合へ虫の声さえ小夜ふけて、いとどあわれにきこゆなり。合へいつしかと、野辺の干草も冬枯れて、落葉散りしき霜おきわたし、梢こずえに降る雪は、春咲く花の心地して、げにおもしろき風情なり。

六、常磐津 辰橋

河竹黙阿弥作詞。はじめ素浄瑠璃として書いてあったものを、五代目尾上菊五郎の希望により、明治二十三年十月東京歌舞伎座で上演された。このとき渡辺の綱を市川左團次、扇折早百合実が鬼女を五代目菊五郎が演じ、新古演劇十種の一となった。

主君源頼光朝臣の命をうけ、維仲卿の姫君のもとへ使いに立った渡辺の綱が、帰り途に堀川の辰橋にさしかかると、美しい女があらわれて道連れをもとめた。一緒に歩くと、それは愛宕山に住む鬼女だったので、正体を見あらわし、源氏の重宝髭切丸の太刀でその片腕を切り落とすという筋。七代目常磐津小文字太夫と六代目岸沢式佐の苦心の名作で、明治時代の常磐津の代表的作品といわれる。歌詞も作曲も活

歴風だが、明治という新しい時代の息吹きの感じられる常磐津で、流行している。

「それ普天の下卒士の浜、王土にあらぬ所なきに、いづくに妖魔の棲みけるか、睦月の頃より洛中へ、悪鬼あらわれ人を取り、夜は往来の人もなし。されば内裏の警衛に、都へ上りし源の、頼光朝臣は暇なく、去る頃深く語らいし、維仲卿の姫君へ、便りもなきでおわせしが、今日しも渡辺源次綱、使いに立ちし帰り道、卯の花咲いて白々と、月照り渡る堀川の、早瀬の流れ落ち合うて、水音すき戻橋。武威たくましき我が君も、恋は心の外にして、かねがね語らい給いたる、維仲卿の姫君へ、蜜々の仰せこうむりて、路次の用意に御秘蔵の、髭切りの太刀賜りしは、武門のほまれ身の面目、片時も早く立ち帰り、かの御方の御返事を、我が君へ申し上げん。夜ふけぬうちに主従が、行かんとなせし後より、一吹き落す青嵐に、岸の柳の騒がしく、心ならねばふり返り、はて心得ぬ、妖怪出ずる取沙汰に、夜に入りては表を鎖し、男子すら通行せぬに、女子の来るはいぶかしし。さてはわれらをおどさんと、姿を変えて妖怪が、こゝへ来ると覚えたり。幸いなるかな討ちとつて、君へ土産に参らせん。二人の者にうちささやき、機密を授け退けて、おのれ妖怪ごさんなれ。太刀引きそばめほの暗き、木下蔭へぞ入りける。またむら立ちし雨雲の、かげ渡る月をよすがにて、三下りへたどる大路に人影も、灯影も見えず我が影を、もしや人かと驚きて、被衣に身を忍ぶ摺、けうの細布ならずして、女子心に胸合わず、思い悩みて来りける。卯月の空の定めなく、降らぬうちにと思えども、こゝは一条の戻橋、見れば行き交う人もなく、ああ便りもなやとたずみて、しばし休らいたりける。綱はこかげを立ち出でて、女性はいずれへ参らるぞ。妾は一条の大宮より、五条のわたりへ参りまするが、ただ一人ゆえ夜道がこわく、ここにたずみおりました。こわいと申すはもつともなり、五条のわたりへ参るとあらば、それがし送つてつかわそう。御詞に従いますれば、お伴ない下さりませ。折から空の雲晴れて、月の光に見かす顔。はてあでやかな。水に映りし影を見て、やや、今水中へ映りし影は、ええ。夜更けぬうちに、いざ疾くどく。西へ廻りし月の輪に、遠く望めば愛宕山、北野は近く清滝の、森を越えるほととぎす、初音ゆかしくふり返り、見

かん。こしやくな事を、ひつつ立てゆかんと立ちかかれれば、綱はいけどり呉んずと、勇力振う時しもある、一天俄にかきくもり、震動なして四方より、黒雲おおい重なりて、綱が襟上むんずとつかみ、砂石を飛ばす暴風に、連れて虚空へ引き上ぐれば、髪切の太刀抜き放し、鬼の腕を切り払い、どつと落ちたる北野の廻廊、悪鬼はむらがる雲隠れ、光を放ちて失せにけり。

七、長唄綱

館

明治二年、根岸の勘五郎といわれた十一代目杵屋六左衛門作曲。このもととなったのは、寛保元年（一七四一）七月江戸中村座上演の「兵四阿屋造」で、これを復活したものが、歌詞はほとんどそのまま使っている。

この曲は前に演奏された「戻橋」の後日物語で、戻橋で鬼女の腕を切り落して帰った渡辺綱は、このような悪鬼は七日以内にその腕を取り戻しに来るといわれ、阿部晴明のいつけ通り、門戸をとぎしてひきこもっている。そこへ綱の故郷から伯母が尋ねて来て、強引に家の中へ入りこんでしまう。そしてせひともその腕を見せてくれといひ、見ているうちに鬼女の正体をあらわし、腕をとりもどして虚空に消え去るといふ筋。

曲全体が劇的要素を持ち、筋がわかり易くできていて、流行している。なお、新古今演劇十種の「茨木」は同じ趣向の曲だが、これは明治十六年に三代目杵屋正治郎が作曲したもので、素ではあまり演奏されない。

へさるほどに、渡辺の源次綱は、鬼神の腕を切り取りつつ、武勇を天下に輝やかせり。へさりながら、かかる悪鬼は七日のうちに、かならず仇をなすなりと、陰陽の博士、晴明が勘文にまかせつつ、綱は七日の

上ぐる顔にはらくくと、樹々の雫も雲運ぶ、雨かと思はば立ち休らい、へ歩き馴れぬ夜道にて、さぞくたびれし事ならん。へいいえ、妾よりあなたこそ、足弱をお連れなされ、おくたびれでござりませう。へしばらくこれで憩われよ。へ連れ立つ道に馴れ易く、今は隔ても中空の、臍も春の名残かな。へ都人とはいいなながら、いともやさしき形風俗、御身が父は何人なるぞ。へ父は五条の扇折、舞を好み舞いし故、妾も幼なき頃よりして、教えを受けしが身の徳に、このほどまでもある御所にお宮仕え致しました。へ恥かしながらそれがしは、いまだ舞を見たことなし、ひとさし舞を見せられまいか。へお送り下さるそのお礼に、只今御覧に入れませう。へ女性は扇借りうけて、会釈をこぼし進み出でて、空も霞みて八重一重、桜狩する諸人が、群れつつこゝへ清水や、初瀬の山の雪と見し、花の散り行く嵐山、惜しむ別れの春過ぎて、夏の初めに後れにし、花も青葉に衣がえ、樹々の緑の美しや。へいや面白き事なりしぞ、かかる技芸のある者を、妻に持ちなばよき楽しみ。へいうをこなたはよきしおに、定めてあなたは奥様を、お持ちなされてござりませう。へ未だ妻は娶らぬが、見らるる通りの武骨者、誰も妻になり手がな。へなに無いたがござりませう。へお情深きお心に、今宵見えし妾さえ、縁を結ぶ露もがな、思う恋路の初蛩、へいい出でかねて胸焦がし、若菜の闇に迷うもの、都女郎はとりわけて、へ妾やさしき花あやめ、引きつ引かれつ沢水に、袖も濡れにし事ならん。へそれは御身の思い違い、かかる名もなき田舎武士、誰が思いをかけようぞ。へいえい立派なお名ゆえに。へなに立派な名とは。へ当時内裏を警衛に、都へ上りし源の、頼光朝臣の身内にて、渡辺源次綱ゆえ。へやいかがしてその名をば、へ恋しく思う殿御ゆえ、とくより存じております。

へ恋しく思うというは偽り、御身がわが名を存せしは、妖魔の術であるうがな。へ星を指されてうちおどろき、へなに妖魔の術とは。へみめよき女に化するとも、その本性は悪鬼ならん。へなんと。へ女は心づかざりしが、月の光に映りたる、影は怪しき鬼形なりしぞ。へやあ。へその本性をあらわせよ。へいかに妖女もたちまちに、憤怒の相をあらわせば、へ後ろにうかがう郎党が、観念せよと組付くを、事ともなさずふり払い、へ我は愛宕の山奥に、幾年棲みて天然と、業通得たる悪鬼なり。車輪の如き目を見開き、炎を吐きし有様は、身の毛もよだつばかりなり。へさてこそ悪鬼でありしよな、へいでこの上は汝をば、わが隠れ家へ連れ行

物思して、仁王経を誦誦なし、門戸を閉じてぞいたりける。へすでに東寺羅生門の、鬼神の腕を切り取りしこと、これひとえに、君の御徳徳ならずや、然るに、晴明が勘文にしたがい、あら気づまりの物思やな。へかかるころへ、津の国の渡辺の里よりも、訪ねて伯母のきたしぐれ。へ紅葉の笠も名にめで、錦をかざすふるさとの、孝の力や杖つき乃の字の姿をも、うしとはいわで牽かれる、綱が館に着きにけり。へ門の外にたたずみて、いかに綱、津の国の伯母がはるばる参りたり。この門開き候え、疾く開けめされい。へ内には綱の音高く、はるばるとの御出なれど、仔細あつて物思なれば、門の内へはかなわす候。へなに、門の内へはかなわぬとな。へ是非に及ばず候。へあら曲もなき御事やな。和殿が幼なきその時は、みづから抱き育てつつ、九夏三伏の暑き日は、扇の風にて凌がせつ、玄冬素雪の寒き夜は、ふすまを重ねあためて、人ならず。ええ汝は邪慳者かなと、声をあげてぞ泣き給う。へさしにも猛き渡辺も、あくまで伯母に口説かれて、是非なく門をおし開き、奥の一間に請じける。へいやとよ綱、鬼神の腕を切りとられし武勇のほど、凡そ天下にかくれなし、してその腕はいづこに在りや。へすなわちこれにと唐櫃の蓋うち開けて、伯母の前にぞ直しける。へその時伯母はかの腕を、ためつすがめつしげしげと、眺めながめていたりしが、次第しだいに面色変り、かの腕を、取るよと見えしがたちまちに、鬼神となつて跳び上り。へ破風を蹴破り現われ出で、あたりを睨みし有様は、身の毛もよだつばかりなり。へいかに綱、我こそ茨木童子なり。わが腕を取り返さんそのために、これまで来ると知らざるや。へ綱は怒りて早速を踏み、斬らんとすれども虚空にあり。へいかにかなし討ち取るべしと、思えど次第に黒雲おおい、鬼神の姿は消え失せければ、かの晴明が勘文に、背きしことの口惜しさよ。なお時を得て討ち取るべしと、勇みたる武勇のほど、へ感ぜぬ者こそなかりけれ。

御 礼 邦 楽 連 合 会

本日はようこそお出かけ下さいまして、ありがとうございます。この会も回を重ねまして、ごらんの通り七回目の演奏会を開催することができました。御協力下さいました皆様に厚く御礼申し上げます。

このようにして、邦楽が自主的に集まって演奏会を開くということは、今までにあまり例がありませんでした。これからは、この催しを土台にして、邦楽について考えたり、話し合ったりして、よりよい明日の邦楽のために努力して参りたいと思えます。

ですから、今日おき下さいました御意見や御感想などを、お寄せ下さいますようお願い申し上げます。

何かと不行届の点もありますが、お許しを願ひまして、どうぞ御ゆつくりとお楽しみ下さいますよう、御願ひ申し上げます。

なお、来年もこの会を二月に開催いたしたいと思っております。まことに恐れ入りますが、はさみこみのアンケート用紙に御記入下さいますれば、御案内を差し上げます。

ありがとうございます。